

## 高等学校古典文法指導法の改善に関する 一つの試み (その2)

—前田本『日本書紀』の未然形活用連語の片仮名傍訓の考察から—

谷 口 政 巳

### 1 はじめに

四天王寺大学紀要第53号掲載の拙論「高等学校古典文法指導法の改善に関する一つの試み」において、筆者は、「樹形型構文図」として品詞生成の原理を構文論的に示し、活用現象のもつ陳述機能を「活用形の意味と機能」としてまとめてみた。

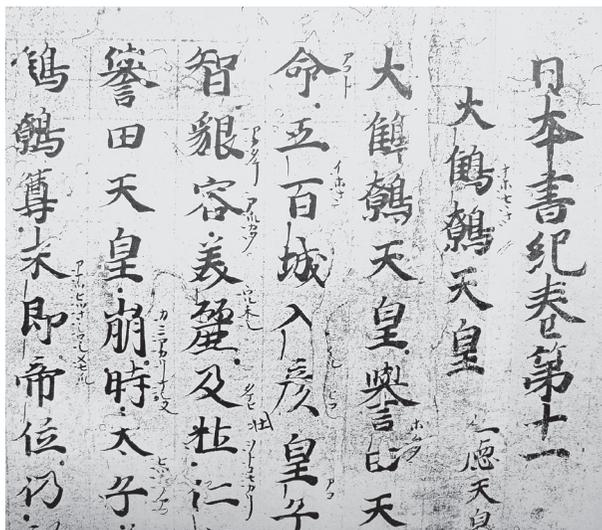
その中で、「活用に陳述機能を認めるということは、活用形に意味を認めるということである。言うまでもなく、未然形には、『まだそうになっていない』という意味があり、已然形も『すでにそうになっている』という意味がある。命令形も『他に命令する』という意味をもっている。つまり、これら三つは意味によってつけられた活用形の名前なのである。一方、連用形、終止形、連体形は、語の断続に関わる機能から命名したもので、命名の基準が異なる。江戸期の国学者による命名であり、『未然形』は見事な命名だと感心する」と述べた。活用形に「未然」の名を最初に用いたのは本居宣長であるが、感心したのは、「未然」という言葉によって「今はそうになってはいないが、将来そうなるかもしれない」という肯定判断と否定判断を上手く結合して表現しているからだ<sup>1)</sup>。

筆者が未然形に関心を持つのは、動詞の活用現象と陳述機能との関わりを研究しはじめて突き当たった疑問からである。もともと、名詞や動詞が生まれた後に助詞や助動詞が生まれたはずである。とすれば、助詞や助動詞がなくとも、動詞のみで動作・作用を「命令」「断定」「否定」したり、さらには「過去」や「未来」のこととして表現しえたはずで、動詞自体の語尾変化(活用)が陳述機能をになっていたものと考えざるを得ない。そこで問題となるのが「未然形」である。動詞の未然形には、肯定判断(推量)と否定判断(打消)という相対立する陳述機能が同居している。「雨 降ら」の後ろに「む」が付く場合と、「ず」が付く場合とでは180度の違いが起きるのだ。助動詞が生まれる以前の動詞の未然形が、別の言い方をすれば、未然形が助動詞の力を借りることなく、なぜ相反する陳述機能を発揮しうるのかということである。

未然形語尾に最も多いア段音に甲乙2音が存在した痕跡が認められないことから、肯定判断と否定判断の陳述上の差異は、語の識別に不可欠なアクセントによる区別によってなされていたのではないかという仮説を筆者は立てた。それを古代のアクセント資料である「前田本日本書紀」の片仮名傍訓に残された声点によって明らかにすることが本稿の第一の目的である。そして、そこから高等学校古典文法指導の改善に有用なものが得られるのではないかと考えている。

## 2 「日本書紀」の古写本とアクセント記号について

養老4年(720年)に撰上された「日本書紀」は、神代より持統天皇に至る30巻の史書である。もとより原本は現存せず、18種もの古写本が断片的に伝わっているのみである。大きく古本系諸本と卜部家本系諸本の2群に分かれ、卜部家本は諸本により30巻すべてが揃うが、鎌倉時代以降のものとなる。一方、古本系の写本には、最も古い9世紀ごろの写本として「佐佐木信綱本」(個人蔵)、「四天王寺本」(四天王寺蔵)、「猪熊本」(個人蔵)



がある。しかし、いずれも第1巻本文の断簡で、訓点は施されていない。また、同時期の「田中本」(奈良国立博物館蔵)も、第10巻のみで、訓点は施されていない。次の10世紀から11世紀ごろの写本「岩崎本」(京都国立博物館蔵)は、第22巻、24巻が残されており、訓点も施されている。しかし、いわゆるヲコト点のみであり、読み下し方を示すものでしかない。

続いて、本稿の基礎資料として用いる「前田本」(前田育徳会蔵)であるが、11世紀ごろの古写本で、第11巻、14巻、17巻、20巻と4巻にわたって残されており、訓点も豊富に施されている。特に、第11巻、14巻には片仮名傍訓が施され、そこにはゴマ点によるアクセント記号まで付されているのである。第11巻と17巻は藤原能信、第14巻は藤原頼宗、第20巻は藤原教通と道長の手の者によって写されたと伝えられる卷子本で、第20巻の巻末紙背に「大二条殿御本」と記されており、藤原教通(996~1075)の所持本であったようだが、これらは九条家に伝えられ、後に三条西家の所蔵となったもので、国宝にも指定されている。次の「図書寮本」(宮内庁書陵部蔵)は、12世紀ごろの写本で、第10巻、第12巻から17巻、第21巻から24巻の11巻にわたって残されている。「前田本」と共通する第14巻と第17巻を見比べて異同が少ないことから同系統の古本系に属するものと考えられており、第10巻以外には訓点も施され、片仮名傍訓やゴマ点によるアクセント記号も付されているが、その多くは「前田本」にのみ存在するものである。したがって、本稿の基礎資料としては「前田本」を用い<sup>2)</sup>、必要に応じて「図書寮本」を参考にした。

前述のとおり「前田本」本文の書写年代はおよそ11世紀と考えられるが、傍訓やゴマ点がいづ、誰によって施されたのかは定かではない。片仮名「ウ」「ツ」「ヲ」の終画が長く内側に入り込むなど、字体の新しさから院政期以降の傍訓と思われるが、その一方で、第11巻の268行目「不欲露」の右傍訓に「アラハニセニマホシ」と記されており、この「ニ」は、打消の助動詞の連用形の古形(奈良時代)と考えられるなど、古い読み下しがなされている。これらのことから、撰録家における「日本紀伝授」の際、口伝されてきた上代の古い訓やアクセントが残されてい



A 動詞の未然形に「ず」が接続するもの22例

- 11-27 未還 イマタカヘリマウコス (○ ○ ○ ○ ○ ● ○ ● ● ○)  
 11-65 不知所如 セムスヘシラス (● ● ○ ● ● ● ○)  
 11-76 弗壺色 ウハヌリセス (● ● ● ● ● ○)  
 11-76 弗藻飴 エカキカサラス (○ ● ● ● ● ● ○)  
 11-76 弗割齊 キリト、ノヘス (○ ● ○ ○ ○ ○ ○ 欠)  
 11-91 不起 タ、⊗ (○ ○ 欠)  
 11-95 不給者 ツカサルコト (● ● ○ ● ○ ○)  
 11-98 不酸餒 スユリクサラスハ (○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○)  
 11-114 不捨遺 ノコリモノヒロハス (○ ○ ○ ○ ○ ○ ● ● ○)  
 11-118 不問 イハ⊗ (● ● 欠)  
 11-162 不和 アマナハス (● ● ● ● ○)  
 11-172 不聴 ウケユルサス (○ ● ○ ○ ● ○)  
 11-191 不泊 トマリタマハ (● ● ○ 欠 欠 欠)  
 11-234 不聆 キコエ⊗ (● ● ● 欠)  
 11-251 不復命 カヘリコトマウサス (○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● ○)  
 11-252 不知 ⊙ ⊙ タマ ⊗ ⊗ (欠 欠 ○ ○ 欠 欠)  
 11-257 勿罪 ツミセス (○ ● ● ○)  
 11-339 不泮 キエス (● ● ○)  
 14-43 不解所由 スルスヘシラス (● ● ○ ● ● ● ○)  
 14-176 鉛花弗御 イロモツクロハス (○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○)  
 14-197 不在 ⊙ ムヘラス (欠 ● ○ ● ○)  
 14-330 不変 カハラスシテ (● ● ● ● ○ ●)

B 補助動詞の未然形に「ず」が接続するもの7例

- 11-7 未即帝位 アマツヒツキシロシメサス (○ ○ ○ ● ● ● ● ● ○ ○ ● ○)  
 11-15 勿疑 ウタカヒタマハス (● ● ● ○ ○ ○ ● ○)  
 11-182 不答言 カヘリコトマウシタマハス (○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ● ○)  
 11-187 不着岸 ト、マリタマハス (● ● ● ○ ○ ○ ○ ○)  
 11-217 不肯參見 マヒアヒタウハス (● ● ○ ● ○ ○ ● ○)  
 11-224 不奉見 マヒアヒタマハス (● ● ○ ● ○ ○ ● ○)  
 14-15 不語 モノモノタマハス (○ ○ 欠 ● ○ ○ ○ ●)

C 助動詞の未然形に「ず」が接続するもの5例

- 11-118 不領 ウナカサレスシテ (○ ○ ○ ● ● ○ ● ●)  
 14-334 不覚 オモホ⊕スシテ (○ ○ ○ 欠 ○ ○ ●)  
 14-398 不覚 オモホエス (○ ○ ○ ● ○)  
 14-399 不可 イハレ⊗ (● ● ● 欠)  
 14-424 不復称夭 イフヘカラス (● ● ● ○ ● ○)

の計34例であった。

下線部に「欠」があるものを除くと25例となるが、そのうち、実に21例（84.0%）において「● ○」の形となっている。つまり、未然形語尾末に高いアクセントが認められ、その直後に急激なアクセントの滝があって、低く打消の助動詞「ず」が発音されているのである。11-27の1例も「● ○」であるため、急激なアクセントの滝があることは明白である。

逆に、未然形語尾末が明らかに低い例は、下線部に「欠」があるものを加えても11-76・91・187・14-15・176の5例にすぎない。うち11-187と14-176の2例は「○ ○」の形であり、14-15の1例は「○ ●」の形、14-330の1例は「● ●」の形となっている。「●」は下降調といわれる「平声軽」の声点であるが、その具体的な音調は、前の音が高い場合はそのまま次の音に移って下降する自然な流れとして理解できる。しかし、前の音が低い場合、次の音が高く始まって下降するのか、低い状態で次の音に移ってさらに下降していくのか必ずしも明らかではない。いずれにせよ未然形語尾末にアクセントはなく、「ず」に移ってから緩やかな滝があるということであろう。

未然形語尾末に高いアクセントが認められ、その直後に急激なアクセントの滝があり、低く打消の助動詞「ず」が発音されるという現象について、金田一春彦氏のように打消の助動詞「ず」が低く発音される傾向とみることもできよう<sup>3)</sup>。しかし、11-182、251、14-398で特徴的に見られるように、終始低平調で推移していながら未然形語尾末のみが高く発音されるという不自然ともいえるパターンが多く認められることから考えると、話者が話しながら打消でまとめようとする意志が働いた場合に未然形語尾末を高く発音する傾向と考えるのが順当な解釈なのではないかと考える。

一方、同じ打消の助動詞でも、「ず」と系列を異にする「ぬ」に接続しているものを同様に抽出してみると、

A 動詞の未然形に「ぬ」が接続するもの4例

- 11-154 凶年 トシエヌ (○ ○ ○ ●)  
 11-268 不欲露 アラハニセニマホシ (○ ● ○ 欠 ● 欠 欠 欠 欠)  
 14-101 不行 ㊦㊧カヌ (欠 欠 欠 ●)  
 14-138 不可乎 ヨウモアラヌカ (○ ○ ● ○ ○ ● 欠)

B 補助動詞の未然形に「ぬ」が接続するもの3例

- 11-168 闕貢 ミツキタテマツラヌ (● 欠 ● ○ ● ● 欠 ● ●)  
 11-185 不在 マシマサ㊨㊩キ (● ● ○ ○ ● 欠 ○)  
 11-308 闕貢 ミツキタテマツラヌコトラ (● ● ○ ○ ● ● ● ● ● ● ○ ○ ●)

の計7例が存在する。

下線部に「欠」のあるものを除くと5例となり、母数は少ないものの、「ず」に接続する場合に強く認められたアクセントの滝は1件も認められなかった。未然形語尾末が高いものは、11-168、308の2例（40.0%）あるが、それは未然形語尾末のみが高くなるような強いアクセントではなく、そのまま「● ●」と高平調に「ぬ」に接続しているのである。残り5例のうち、11-154、185、14-138の3例は「○ ●」の形で、アクセントの滝の逆の現象すら認められるの

である。

この現象をどう理解したらよいのだろう。7件の用例は、文脈から

11-154は「無凶年之患（トシエヌウレヘナシ。）」

14-101は「何人不行（ヒトノアリカヌヲウカカヒ、）」

14-138は「無乃不可乎（ムシロヨウモアラヌカ、）」

11-168は「問闕貢之事（ミツキタテマツラヌコトヲトフ。）」

11-185は「何皇后不在（キサキノマシマサヌトキヲウカガヒ、）」

11-308は「令問其闕貢（ソノミツキタテマツラヌコトヲトハシム。）」

ということであり、「ぬ」が連体形であるため当然のことながら、すべて「ぬ」の後ろに体言や助詞があり、その体言がさらに文を展開しているものばかりである。

係り結びの用例がないため断言はできないが、文の言いおさめとして用いられない連体形の「ぬ」が高く発音されることはさして不思議なことではない。しかし、打消の陳述機能をもつはずの未然形語尾末に強いアクセントがないことの説明は必要であろう。

筆者は、次のように解釈している。打消の助動詞「ず」は、もともと活用のない終助詞であった。動詞の未然形語尾末にアクセントを付けることによって打消の陳述を表し、それに終助詞の「ず」を添えて終止していたものと考え。その後、中止の連用形や仮定条件の未然形にはそのまま「ず」が用いられていたものの、体言や用言を修飾する場合には、「ず」の後ろに格助詞の「の」や「に」が接続して、連体形「ぬ」や連用形「に」が生まれ、さらには「ク語法」の未然形「な」や確定条件の已然形「ね」が生まれて「ナ行四段」で活用する助動詞となり、言いおさめる終止形「ず」以外の陳述を担うようになった。一旦助動詞として活用し始めると、陳述機能も動詞から助動詞に移っていき、動詞の未然形が打消の陳述を表す場合に見られた強烈なアクセントは徐々に消失していったものではないかと考えている。

最後に、打消推量（文脈上は打消意思）の助動詞「じ」に接続しているものが1例認められる。

11-182 不聴 ユルサシト（○ ○ ○ ● 欠）

であるが、動詞の未然形語尾が低く、助動詞「じ」に移って下降するもので、「ず」の例にも1例認められたアクセント型である。

## ② 推量の陳述に用いられた未然形

次に、推量（意思・希望・勧誘・仮定・適当などを含む）の陳述に用いられた未然形の例を抽出すると、32例認められる。これら32例の未然形活用語尾の後ろに推量の助動詞「む」（「まほし」を含む）が接続しているものを抜き出してみると、

A 動詞の未然形に「む」が接続するもの27件

11-10 登 シラムヤ（● ● ● ●）

11-65 不知所如 セムスヘシラス（● ● ○ ● ● ● ○）

11-68 何謂我乎 ヤツカレライカ、オオサムヤ（○ ○ ● ○ ● ● ○ ○ ○ ○ ○ ● ●）

11-69 奏 マウサム（○ ● ○ ○）

11-126 将防 ホソカムトシ（○ ○ ○ ○ ● ●）

- 11-156 愛           メクマムト (○ ○ ○ ○ ○)
- 11-157 妨           サマタケムヤ (● ● ● ● ○ ●)
- 11-235 何由          ナニ、ヨリテナラム (○ ○ ● 欠 ○ ● ○ ○)
- 11-244 及           オヨハムトシテ (● ● ● ● ○ ● ○)
- 11-246 出行          アリカムトキニ (○ ● ● ● ○ ○ ●)
- 11-263 欲失親         ハラカラヲウシナハマホシミ (○ ○ ○ ○ ● ● ● ○ ○ ● ○ ● ○)
- 11-265 納           マキラム (○ ● ● ●)
- 11-267 所逮         ㊦カムトコロニ (欠 ● ● ● ● ● ●)
- 11-286 呵責         コロヒセム (欠 欠 欠 ○ ●)
- 11-329 除           ヤメム (● ● ●)
- 14-5 将沐浴        ミユアマムト (● ○ ○ ● ● ○)
- 14-22 送           タテマタ㊦ムヤ (○ ● ● ○ 欠 ● ●)
- 14-35 期狡           カリセムトチキリ (○ ● ● ● ○ ● ● ○)
- 14-36 勸遊郊野      ノアソヒセムトス、メテ (○ ○ ○ ○ ● ● ● ● ● ● ○ ●)
- 14-45 欲遣慮        ミココロヤラムト (● ● ● ● ● 欠 ● ●)
- 14-110 応導        イハム (● ● ●)
- 14-138 好獸無乃     シ、コノムタマフトマウサム (○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○)
- 14-177 罕儻         タクヒハマ㊦シアラム (○ ○ ● ● ● ● ● ○ ○ 欠)
- 14-311 自念将刑    ㊦ロサムトオホシ (欠 ● ● ● ○ ○ ○ ○)
- 14-418 欲寧         ヤスラカニセムト (○ ○ ● ○ ○ ● ● ○)
- 14-432 崩           シナム (○ ● ●)
- 14-432 害           ヤフラム (○ ○ ○ ○)
- B 補助動詞の未然形に「む」が接続するもの1件
- 14-349 欲設        アヘタマハムトシテ (○ ○ ○ ○ 欠 ● ○ ○ 欠)
- C 助動詞の未然形に「む」が接続するもの2件
- 11-289 活           ワタラハム (● ● ● ● ○)
- 14-99 偽使鷓茲鳥ウカハセムトアサムキテ (○ ○ ○ ● ● ○ ● ● ● ○ ●)

の30例であった。

下線部に「欠」があるものを除くと26例となるが、そのうち、11-10・65・246・265・267・329、14-5・35・36・99・432の11例が「● ●」、11-69・126・156・235・、14-138、432の6例が「○ ○」であり、あわせて17例（65.4%）でアクセントの昇降のない、平板な音調で接続しているのである。これが推量の陳述に見られる基本的なアクセントの型だと思われる。11-157・289の2例に打消のような「● ○」型のアクセントの滝が見られるが、ともに未然形語尾末のみにアクセントがつくような強いものではない。反対に、11-68・286の2例では「○ ●」のようなアクセントの滝の逆の現象さえ認められる。また、11-244・14-110・311の3例は「● ●」型の下降調で、残る1例は14-418の「● ●」と下降調が連続するものであった。

推量のアクセント型の多様さについて筆者は次のように解釈している。助動詞「む」は後ろ

に他の助動詞が接続することがない。したがって、文末に位置するという点で「ず」と同様に前身は終助詞だと考えられる。推量の陳述で言いおさめる場合は、未然形語尾末のみに強いアクセントを付けることなく、平板に終助詞の「む」を添えていたのであろう。ところが、活用しない「ず」と異なり、「む」の場合は体言を修飾する場合そのまま「む」が用いられ、ク語法をつくる未然形「ま」や、反語や逆接の確定条件を表す已然形「め」などのように「む」自体が「マ行四段」の助動詞として活用し始め、そのことによって動詞の陳述機能を弱めていったものと思われる。打消の陳述を表す場合に見られた未然形語尾末の強烈なアクセントはもともと存在せず、平板な音調を中心としつつ、推量の助動詞に特有の様々な陳述に応じて抑揚が生じたものではないかと考えている。

### ③ 使役・尊敬の陳述に用いられた未然形

さらに、使役・尊敬（ともに動詞化したものを含む）の陳述に用いられた未然形の例を抽出してみると、25例存在する。

これら25例の未然形活用語尾の後ろに使役・尊敬の助動詞「す」（四段型は尊敬、下二段型は使役）が接続しているものを抜き出してみると、

#### A 動詞の未然形に「す」が接続するもの14件

11-7	未即位	アマツヒツキシロシメサス (○ ○ ○ ● ● ● ● ● ○ ○ ● ○)
11-15	須即位	アマツヒツキシロシメセ (○ ○ ○ ○ ● ● ● ● ● ○ ○ ○)
11-27	遣	ツカハサレテ (● ● ● ● ○ ●)
11-31	御宇	アメノシタシラシ、 (○ ○ ○ ● ● ● ○ ● ●)
11-36	知	シロシメセレトモ (● ● ● ● ● ○ ○ ●)
11-74	即天皇位	アマツヒツキシロシメス (○ ○ ○ ● ● ● ● ● ● ○ ○ ●)
11-133	不令泛	ナウカハセソ (● ● 欠 ● ● ○)
11-249	随相夢	イメアハセノマ、ニ (○ ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○ ●)
11-333	運	メクラシ (● ● ● ○)
14-145	嫁	アハセ (○ ○ ○)
14-165	示	ミセ (○ ●)
14-168	不肯聴上	ユルシマウノホ <sup>㊦</sup> ㊧ (○ ○ ● ○ ● ● ● ● ● 欠)
14-180	幸	ツカハシツ (● ● ● ○ ●)
14-307	出使	ツカハス (● ● ● ○)

#### B 補助動詞の未然形に「す」が接続するもの0件

#### C 助動詞の未然形に「す」が接続するもの0件

の14例であった。

下線部に「欠」があるものを除くと13例となるが、そのうち、11-7・15・36・74・249・333、14-180・307の8例（61.5%）で「● ○」型が認められる。未然形語尾末のみの強いアクセントとは思われないが、打消の「ず」に準ずるようなアクセントの滝が存在すると言える。11-27・133の2例は「● ●」型、14-145は「○ ○」型と、あわせて3例（23.1%）が平板な音

調で接続している。わずかながら、14-165で「○ ●」型、11-31で「○ ●」型が認められる。

これを筆者は次のように解釈している。「そうさせる」という使役の陳述は、「そうならない」という打消の陳述が当然の前提になっているため、打消に准ずるアクセントの滝が「そうさせる」という使役や、そのような力を持つという尊敬の陳述の中に残滓として残っているものとする。

同様に、未然形活用語尾の後ろに使役の助動詞「しむ」が接続しているものを抜き出してみると、

A 動詞の未然形に「しむ」が接続するもの10件

- 14-73 索            ⊙ハシ△ (欠 ○ ○ 欠)  
 14-77 割            ツクラシム (○ ○ ○ ●)  
 14-97 使任身<sup>マ</sup>        ハラマシメ (● ○ ○ 欠 欠)  
 14-100 問          トハシメ△▽ (● ● ● ○ ○ ●)  
 14-157 桑          クハコカシメテ (○ 欠 ○ ○ ● ●)  
 14-194 勿通        ⊕カヨハシ⊗ (欠 ● ● ● ● 欠 欠)  
 14-334 相撲        スマヒトラシム (● ○ ● ○ ○ ○)  
 14-360 莫預        ナクハラシメソ (● ○ ○ ○ ○ ○)  
 14-386 叱          タケハシメ (○ ○ ○ ●)  
 14-432 勿令侮慢   ナアナツラシメソ (欠 ● ● ● ● 欠 欠 欠)

B 補助動詞の未然形に「しむ」が接続するもの0件

C 助動詞の未然形に「しむ」が接続するもの0件

の10例である。

用例がすべて14巻に限られていることは、傍訓の施された時期に原因があるものと思われるが、ここでは触れる余裕はない。下線部に「欠」があるものを除くと8例と少なくなるが、14-73・77・334・360・386の5例が「○ ○」型、14-100・194の2例が「● ●」型、あわせて7例（87.5%）が平板な音調で接続しており、残り1例は、14-157の「○ ●」型である。同じ使役でありながら、アクセントの滝が見られた「す」とは異なり、圧倒的に平板な調子となっている。

これを筆者は次のように解釈している。使役の「しむ」は、倭語として生まれた「す」と異なり、漢文を訓読する際に「使」を読み下す方法として生まれた新しい助動詞であることに原因があるのではないかと考える。

④ 自発・受身・可能の陳述に用いられた未然形

次に、自発・受身・可能の陳述に用いられた未然形の7例を抽出してみよう。

これら7例の中から、未然形活用語尾の後ろに受身・自発の助動詞「る（らる）」が接続しているものを抜き出してみると、

A 動詞の未然形に「る（らる）」が接続するもの4例

- 11-24 所任        アツカレル (○ ○ ● ○ ●)

- 11-118 不領      ウナカサレスシテ (○ ○ ○ ● ● ○ ● ①)  
 14-226 所乗      モマレナマシ (● ● ○ ● ● ○)  
 14-358 哀泣      イサチラル (○ ○ ○ ○ ●)

- B 補助動詞の未然形に「る」が接続するもの0例  
 C 助動詞の未然形に「る」が接続するもの1例

- 11-27 遣      ツカハサレテ (● ● ● ● ○ ●)

の5例であった。母数も少なく即断できないが、「● ○」型が3例(60.0%)と比較的多いものの、平板な音調である「● ●」型も「○ ○」型もそれぞれ1例あり、一定の傾向を認めることはできない。

また、未然形活用語尾の後ろに自発の助動詞「る」の古形「ゆ」が接続しているものを抜き出してみると、

- A 動詞の未然形に「ゆ」が接続するもの2件  
 14-334 不覚      オモホ<sup>㊦</sup>スシテ (○ ○ ○ 欠 ○ ○ ●)  
 14-398 不覚      オモホエス (○ ○ ○ ● ○)

- B 補助動詞の未然形に「ゆ」が接続するもの0件  
 C 助動詞の未然形に「ゆ」が接続するもの0件

の2例であった。下線部に「欠」があるものの、語形が同じであることから、ともに「○ ●」型のアクセントと考えられる。未然形語尾末が低く、助動詞「ゆ」に強いアクセントがあったと見ることもできようが、「え」が「ゆ」の未然形で打消の陳述に用いられているため、「え」に強いアクセントが生じたものとも理解できる。いずれにしても母数が少なすぎて即断はできない。

「ゆ」と「る」を合算してみても、アクセントの滝が認められるもの3件(42.9%)、平板なもの2件(28.6%)、アクセントの滝が認められるもの2件(28.6%)と分散してしまい、特定の傾向を見出すことはできない。

### ⑤ その他の未然形

他に、継続の陳述に用いられた未然形の例が1例だけあった。

- 11-289 活      ワタラハム (● ● ● ● ○)

であるが、母数が1では何とも言いがたい。

また、陳述とは関わりのないものの、活用語を名詞化する「ク語法」の例が4例あった。「ク語法」については、未然形に接続したものではなく連体形に「アク」が接続・縮約したものであるという説もあり、名詞化するのに未然形を用いる論理的必然性もないが、一応抜き出しておく。

- A 動詞の未然形に「く」が接続するもの1件  
 11-331 言      マウサク (○ ○ ● ● ①)  
 B 補助動詞の未然形に「く」が接続するもの3件  
 11-7 諮      マウシタマハク (○ ○ ● ○ ○ ● ●)  
 11-127 夢      ミイメミタマハク (● ● ● ① ○ ○ ○ ○)

11-174日 マシタマハク (○ ● ○ ○ ○ ●)

C 助動詞の未然形に「く」が接続するもの0件

以上4例であるが、これも母数が少ない上に、特定の傾向は見出しがたい。

#### 4 考察

以上、未然形の陳述機能とアクセントとの関わりについて述べてきたが、ここでまとめておきたい。

未然形が打消の「ず」に接続する場合、未然形語尾末に強いアクセントが認められ、その直後に急激なアクセントの滝があって「ず」に接続する傾向があることは明らかである。しかし、打消の「ぬ」に接続する場合は、未然形語尾末に特段のアクセントはなく、高い「ぬ」に接続して展叙していく。

また、未然形が推量の「む」に接続する場合も、未然形語尾末に特段のアクセントはなく、平板な調子で「む」に接続する。

次に、使役・尊敬の「す」に接続する場合、未然形語尾末にアクセントがあり、その直後に急激なアクセントの滝があって「す」に接続する傾向が認められる。しかし、使役の「しむ」に接続する場合は、未然形語尾末に特段のアクセントはなく、平板な調子で「しむ」に接続する。

最後に、自発の助動詞「ゆ」および「る」に接続する場合、未然形語尾末に特段のアクセントはなく、また特定の傾向も認められない。

以上のことから少なくとも次のことが言えよう。すなわち、未然形の語尾末に強いアクセントがあり、その直後急激なアクセントの滝がある場合は、そのほとんどが打消であり、未然形の語尾末に強いアクセントがなく、そのまま平板な音調で推移する場合は、そのほとんどが推量であるということである。

具体的に示せば、「雨 降ら」を、

A アメフラ (○ ● ○ ●)

B アメフラ (○ ● ○ ○ または ○ ● ● ●)

と読んだとき、Aのアクセントなら「打消」、Bのアクセントなら「推量」と判断できるのである。つまり、未然形のもつ「打消」・「推量」の相反する陳述内容は、未然形語尾末のアクセントの型によって決定されていたのである。したがって、助動詞の接続をまたずに、Aの場合は「雨が降っていない」という打消型の陳述となり、Bの場合は「雨が降るかもしれない（降らないかもしれない、降ってほしい、自然に降るだろう…）」といった推量型の陳述となるといえよう。

このように動詞の活用形のみで広い意味での「未然」の陳述が可能であったとすれば、「雨降らば」が助動詞抜きで仮定の条件となることも、「雨降らで」が助動詞抜きで打消の接続になることも極めて当然のこととなる。また「雨降らな」「雨降らぬ」や「雨降らなむ」「雨降らばや」が希望や願望の意味になることも当然のことである。また、船子の口語として文法的に説明されることのない「なほこそ国つ方は見遣らるれ。我が父母ありとし思へば、帰らや」（土佐日記）の表現も、「帰ら」に希望の陳述があり、その後に感動の終助詞「や」が付いているものと理解できるし、「花咲か爺」のような文法的に不自然にも思える表現も、「咲か」に使役

の陳述があると理解すれば簡単に片付けられる。

残念なのは、「前田本日本書紀」の用例の中に、未然形に接続助詞が付いて仮定条件を表す例、終助詞が付いて願望や希望・意思などを表す例が見出せないことである。未然形に活用のない助詞が接続する場合は、活用のある助動詞以上にアクセントが固定化されていたものと推測されるからである。他の訓点資料を用いて改めて考察したい。

## 6 終わりに

筆者の管見するところでは、古代日本語のアクセントについては多くの研究がなされているが、主として名詞や助詞などの活用しない語彙を対象にしており、活用語についての研究も「類聚名義抄」などを資料に基本形を対象にしたものばかりであり、活用連語のアクセントを対象に調査された研究は極めて少ないと思われる。

その中で、早田輝洋氏が図書寮本『類聚名義抄』を中心資料に、生成文法の立場から、平安末期京畿方言における動詞の各活用形接辞のアクセントに触れられているのが注目される<sup>5)</sup>。それによると、

終止接辞は/u/、連用接辞は/i/、連体接辞は/ru/、已然接辞は/re/、仮定接辞は/a/ba/、否定接辞「ず」は、/a'zu/、否定接辞「ぬ」は、/an/、命令接辞は/yo/と考えられる。

と結論のみ極めて簡潔に述べられているが、図らずも前田本『日本書紀』を用いた本稿でも、未然形の打消表現に関しては同様の結果が裏付けられたと考える。

古典文法指導の改善のため、活用形に陳述性を認める指導法の有効性と合理性の研究を進めてきたが、今回は文献的な実証にまで踏み込んでしまった。しかし、未然形活用語尾のアクセントによって「打消」と「推量」に分かれるという発見は筆者の創見ではないかといささか自負するところでもある。高等学校の古典文法の指導において活用形の陳述機能を活用することが有効であるばかりでなく、古典の音読指導においても、「ず」に接続する未然形語尾末は強いアクセントを付けて読ませることが即読即解を可能にする有効な指導法となるものだと考える。

先学諸兄の研究について多くの見落としがあるものと恐れるが、なにとぞご寛恕の上、大方の御批正をお願い申し上げる次第である。

「前田本」に見られる未然形活用連語のアクセント一覧

〈巻第 11 大鷦鷯天皇（仁徳天皇）〉

行数	本文	片仮名傍訓とアクセント型	未然形の陳述
7	未即帝位	アマツヒツキシロシメサス ○○○●●●●○○●○	尊敬・打消
7	諮	マウシタマハク ○○●○○●●	(ク語法)
10	登	シラムヤ ●●●●	意思
15	勿疑	ウタカヒタマハス ●●●○○○●○	打消
15	須即帝位	アマツヒツキシロシメセ ○○○○●●●●○○○	尊敬
24	所任	アツカレル ○○●○●	受身
27	遣	ツカハサレテ ●●●●○●	尊敬・受身
27	未還	イマタカヘリマウコス ○○○○○●○●●○	打消
31	御宇	アメノシタシラシ、 ○○○●●●○●●	尊敬
36	知	シロシメセレトモ ●●○●●○○●	尊敬
38	登	シラム ●●●	意思
65	不知所如	セムスヘシラス ●●○○●●●○	適当・打消
68	何謂我乎	ヤツカレライカ、オオサムヤ ○○●○●●○○○○○●●	推量
69	奏	マウサム ○●○○	意思
74	即天皇位	アマツヒツキシロシメス ○○○●●●●○○●	尊敬
76	弗壺色	ウハヌリセス ●●●●●○	打消
76	弗藻飭	エカキカサラス ○●●●●○	打消
76	弗割齊	キリト、ノヘス ○●○○○○●	打消

91	不起	タ、㊦ ○○欠	打消
95	不給者	ツカサルコト ●●○○○○	打消
98	不酸餒	スユリクサラスハ ○○●○○●○○	打消
114	不拾遺	ノコリモノヒロハス ○○○○○○●●○	打消
118	不領	ウナカサレスシテ ○○○●●○●●	受身・打消
118	不問	イハ㊦ ●●欠	打消
126	将防	ホソカムトシ ○○○○●●	意思
127	夢	ミイメミタマハク ●●●●○○○○	(ク語法)
133	不令泛	ノウカハセソ ●●欠●●○	使役
154	凶年	トシエヌ ○○○●	打消
156	愛	メクマムト ○○○○○	希望
157	妨	サマタケムヤ ●●●●○○●	意思
162	不和	アマナハス ●●●●○	打消
168	闕貢	ミツキタテマツラヌ ●欠●○●●欠●●	打消
172	不聴	ウケユルサス ○●○○●○	打消
174	曰	マシタマハク ○●○○○●	(ク語法)
182	不聴	ユルサシト ○○○●欠	打消意思
182	不答言	カハリコトマウシタマハス ○○○○○○○○○○●○	打消
185	不在	マシマサ㊦㊧キ ●●○○●欠○	打消
187	不着岸	ト、マリタマハス ●●●○○○○○	打消

高等学校古典文法指導法の改善に関する一つの試み（その2）

191	不泊	トマリタマハ ●●○欠欠欠	打消
213	視	ミソナハ ○●●●	尊敬
217	不肯参見	マヒアヒタウハス ●●○●○○●○	打消
224	不奉見	マヒアヒタマハス ●●○●○○●○	打消
225	恋思	シノヒオモホス ●●○○○○○	尊敬
234	不聆	キコエ㊦ ●●●欠	打消
235	何由	ナニ、ヨリテナラム ○○●欠○●●○○	推量
244	及	オヨハムトシテ ●●●●○○●○	推量
246	出行	アリカムトキニ ○●●●○○●	假定
249	随相夢	イメアハセノマ、ニ ○○○●○○○○●	使役
251	不復命	カヘリコトマウサス ○○○○○○○●○	打消
252	不知	㊧㊨タマ㊩㊦ 欠欠○○欠欠	打消
257	勿罪	ツミセス ○●●○	打消
263	欲失親	ハラカラヲウシナハマホシミ ○○○○●●●○○●○○	希望
265	納	マキラム ○●●●	意思
267	所逮	㊧カムトコロニ 欠●●●●●●	假定
268	不欲露	アラハニセニマホシ ○●○欠●欠欠欠欠	打消・希望
286	呵責	コロヒセム 欠欠欠○●	意思
289	活	ワタラハム ●●●●○	継続・希望
308	闕貢	ミツキタテマツラヌコトラ ●●○○●●●●○○●	打消

320	発臆	イカラシ ●●●○	尊敬
329	除	ヤメム ●●●	意思
331	言	マウサク ○○●●	(ク語法)
333	運	メクラシ ●●●○	尊敬
339	不泮	キエス ●●○	打消

卷第 14 大泊瀬幼武天皇 (雄略天皇)

5	将沐浴	ミュアマムト ●○○●●○	意思
15	不語	モノモノタマハス ○○欠●○○○●	打消
22	送	タテマタ <sup>㊥</sup> ムヤ ○●●○欠●●	意思
35	期狡	カリセムトチキリ ○●●●○●●○	勧誘
36	勧遊郊野	ノアソヒセムトス、メテ ○○○○●●●●●●	勧誘
43	不解所由	スルスヘシラス ●●○●●●○	打消
45	欲遣慮	ミココロヤラムト ●●●●●欠●●	意思
73	索	㊤ハシ <sup>㊦</sup> 欠○○欠	使役
77	割	ツクラシム ○○○○●	使役
97	使 <sup>マ</sup> 任身	ハラマシメ ●○○欠欠	使役
99	偽使鷗茲鳥	ウカハセムトアサムキテ ○○○●●○●●●○●	使役・意思
100	問	ト <sup>㊧</sup> シメ <sup>㊨</sup> タ <sup>㊩</sup> マ <sup>㊪</sup> フ ●●●○○○●	使役
101	不行	㊫ <sup>㊬</sup> ㊭ <sup>㊮</sup> ヌ 欠欠欠●	打消
110	応導	イハム ●●●	意思

高等学校古典文法指導法の改善に関する一つの試み（その2）

138	好獸無乃	シヽコノムタマフトマウサム ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○	推量
138	不可乎	ヨウモアラヌカ ○ ○ ● ○ ○ ● 欠	打消
145	嫁	アハセ ○ ○ ○	使役
157	桑	クハコカシメテ ○ 欠 ○ ○ ● ● ●	使役
165	示	ミセ ○ ●	使役
168	不肯聽上	ユルシマウノホ㊦㊧ ○ ○ ● ○ ● ● ● ● 欠	使役
176	鉛花弗御	イロモツクロハス ○ ○ ● ○ ○ ○ ○ ○	打消
177	罕儻	タクヒハマ㊨シアラム ○ ○ ● ● ● ● ● ○ ○ 欠	推量
180	幸	ツカハシツ ● ● ● ○ ●	尊敬
194	勿通	㊩カヨハシ㊪㊫ 欠 ● ● ● ● 欠 欠	使役
197	不在	㊬ムヘラス 欠 ● ○ ● ○	打消
226	所乗	モマレナマシ ● ● ○ ● ● ○	受身
254	全	イケラム ○ ● ● ○	可能
262	観	㊭セマツラム 欠 欠 ● ● ● ●	意思
307	出使	ツカハス ● ● ● ○	尊敬
311	自念将刑	㊮ロサムトオホシ 欠 ● ● ● ○ ○ ○ ○	意思
330	不変	カハラスシテ ● ● ○ ● ○ ●	打消
334	相撲	スマヒトラシム ● ○ ● ○ ○ ○ ○	使役
334	不覚	オモホ㊯スシテ ○ ○ ○ 欠 ○ ○ ●	自発・打消
349	欲設	アヘタマハムトシテ ○ ○ ○ ○ 欠 ● ○ ○ 欠	意思

358	哀泣	イサチラル ○ ○ ○ ○ ●	自発
360	莫預	ナクハラシメソ ● ○ ○ ○ ○ ○ ○	使役
386	叱	タケハシメ ○ ○ ○ ○ ●	使役
398	不覚	オモホエス ○ ○ ○ ● ○	自発・打消
399	不可	イハレ㊦ ● ● ● 欠	可能・打消
418	欲寧	ヤスラカニセムト ○ ○ ● ○ ○ ● ○ ○	希望
424	不復称天	イフヘカラス ● ● ● ○ ● ○	打消
432	崩	シナム ○ ● ●	推量
432	害	ヤフラム ○ ○ ○ ○	推量
432	勿令侮慢	ナアナツラシメソ 欠 ● ● ● ● 欠欠欠	使役

註

- 1) 現代文法の未然形にあたる活用形について、谷川士清の『日本書紀通證』(1748)では「聲韻一體」、富士谷成章の『挿頭抄』(1767)では「来(あらまし)」、賀茂真淵の『語意考』(1769)では「初(ことはじむるこゑ)」と名づけている。この中では、富士谷の「来」が未来の時制表現と捕らえている点が注目される。次に、本居宣長の『漢字三音考』(1781)において初めて「第一言【アカサタナハマヤラフ】ハ未然ラザルニ用ヒ」と陳述機能に対応した「未然」の命名がなされている。その後、鈴木月良の『活語断続譜』(1803頃)では「七等・八等」と番号で示し、東条義門の『和語説略図』(1833)では「将然言」と名づけている。東条の「将然」は、本居宣長とは異なり未然形の陳述の推量的側面のみを強調した命名である。明治以降の文法教科書で「未然形」の名を最初に用いたのは、芳賀矢一の『中等教科明治文法』(1904)である。
- 2) 本稿の底本として、前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成26日本書紀』(2002)八木書店を用いた。
- 3) 桜井茂治『古代国語アクセント史論考』(1975)桜楓社によれば、奈良時代の四声の調価について、井上奥本、小西甚一、金田一春彦の説を比較検討し、上声を高平調、去声を上昇調とする金田一説を妥当としている。また、平安中期から末期にかけて付された東声(平声軽)の声点に注目された小松秀雄「アクセントの変遷」『岩波講座日本語5 音韻』(1977)岩波書店においても、平声(平声重)を低平調、東声(平声軽)を下降調、上声を高平調、去声を上昇調とされている。
- 4) 石塚晴通『前田日本書紀院政期點(本文篇補)』(1977)北海道大学文学部紀要
- 5) 早田輝洋「生成アクセント論」、『岩波講座日本語5 音韻』(1977)岩波書店